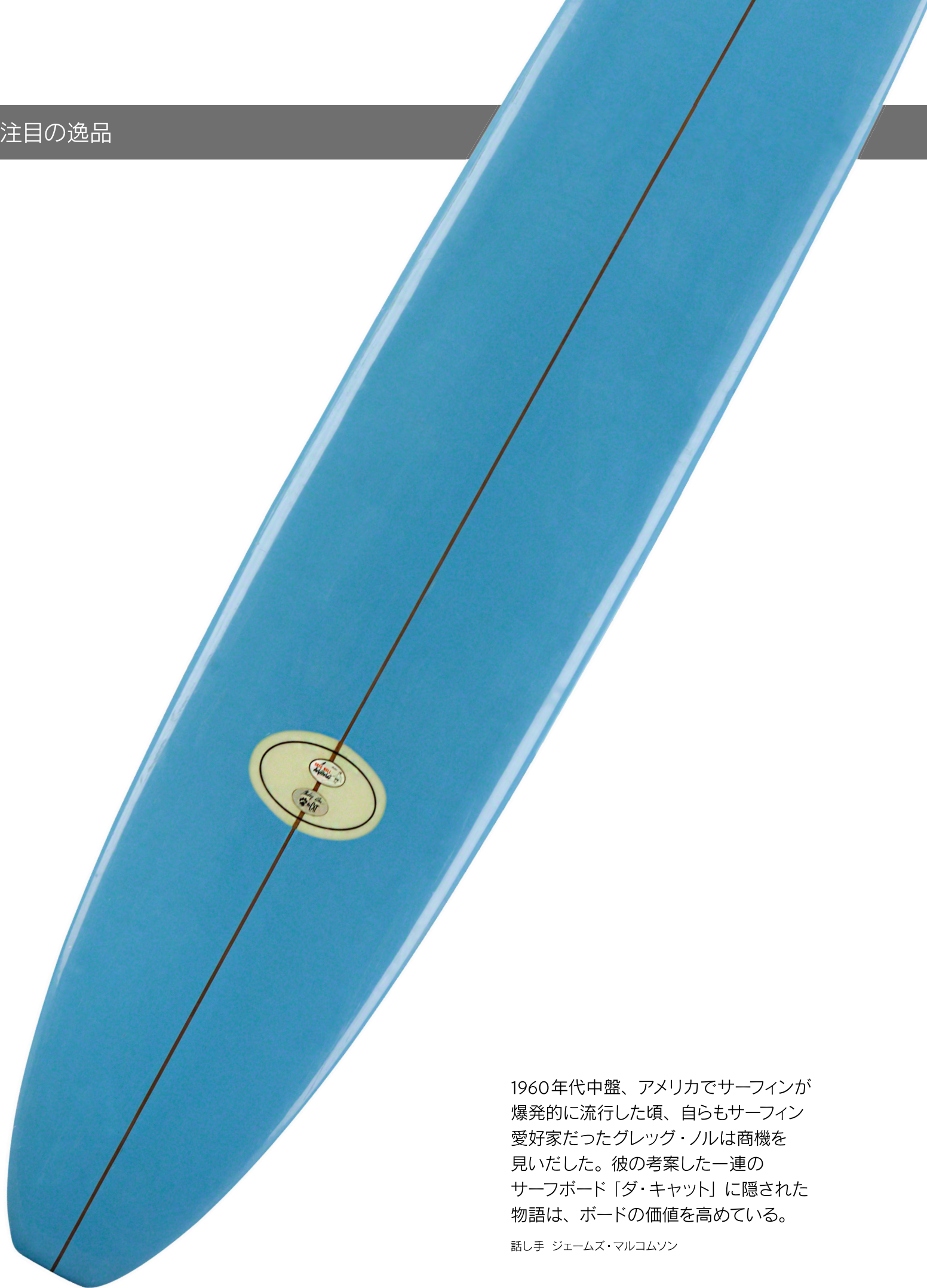


注目の逸品



1960年代中盤、アメリカでサーフィンが爆発的に流行した頃、自らもサーフィン愛好家だったグレッグ・ノルは商機を見いだした。彼の考案した一連のサーフボード「ダ・キャット」に隠された物語は、ボードの価値を高めている。

話し手 ジェームズ・マルコムソン

これはどういった品物ですか。

グレッグ・ノル・サーフボードズ社より発売された1966年の「ダ・キャット」モデルです。ポリウレタン発泡スチロール製で、繊維ガラスとポリエステル樹脂に覆われた本品は、その卓越したデザインと1960年代中頃のサーフィン人口が爆発的に増えた時期の名サーファー、ミクロス・ドラ（愛称ミッキー）の推薦により、サーファー、コレクターを問わず高い人気を得ました。

サーフボードは第二次大戦後、ハワイでそれまで一般的に使われてきた重厚な無垢材の厚板から一変しました。カリフォルニアの波、なかでもマリブ・ポイントの極端に切り立った波に合うボードが求められ、最終的にはフォームコアボードに替わったのです。後端に立つてボードを回し、続いて波面でスピードを上げながら、ボードの先端に移動するというスタイルが人気絶頂でした。ドラには、その滑らかな足の動きから「ダ・キャット」というニックネームが付きましました。

大衆文化による影響はありましたか。

1950年代末から1960年代前半のビーチ映画やポピュラー音楽のブームにより、状況はがらりと変化しました。サーフィン人口がそれまで比較的少なかった南カリフォルニアには、初心者が大勢押し寄せました。オアフ島・ノースショアの波乗りでその名が知られていたグレッグ・ノルは、このブームに乗ってサーフボード工場を立ち上げ、全米

の取引店に毎週100点を超えるボードを出荷するようになりました。

しかし、このようなサーフィンの新たな商業的側面に、腹を立てていたのがドラでした。混雑の激しくなったマリブでは、時折割り込んでくる別のサーファーを跳ね除けつつ、人だかりを縫うようにして波乗りするドラの姿が見られました。サーフィン・コンテストの審査員の前で波乗りをしながらトランクスを脱ぎ落とすという行動に出たこともあります。しかし、彼は自分のステータスを利用し続け、さまざまな映画でスタントマンとしてサーフィンをし、ハリウッドのパーティーにも足繁く通いました。アロハシャツよりも欧州のファッションを好み、カリフォルニアのビーチシーンに姿を現すことを避けたため、彼の神秘性は一層深まりました。

その後のブームの変遷は？

ノルのサーフボード「ダ・キャット」が熱狂的ファンを生み出したのは、その華々しいデザインよりも、発売時の広告キャンペーンが理由です。1966年から1968年に主要サーフィン誌に掲載された広告では、ドラの刺激的で反商業主義的なスタンスにスポットが当て

られました。自分のトロフィーをたくさん詰め込んだくず入れの上に座った写真、ドイツのパイロット風の写真、さらには2枚のサーフボード上で裸になった写真などが特集されています。ドラの写真や痛烈な発言は、実際に波乗りをした経験と、アメリカの一般大衆に乗っ取られてしまったビーチパーティーとの間で感じる葛藤を見事に表現しています。

実のところ、わずか数年でブームは終焉を迎えました。1960年代後半には、ずっと短く扱いやすいボードを手にした新しい世代のサーファーが登場し、マリブで発達した優雅な滑りと比べてはるかにアグレッシブなスタイルを

確立しました。大手サーフボードメーカーの多くは変化の波に乗ることができず、最終的には撤退してしまいます。ドラ自身も隠遁し、人の少ない波の待つ欧州やアフリカに拠点を移してしまいい、もはやどうしようもないほど時代遅れとなった8000点に及ぶボードの大部分は、物置の垂木同様の扱いとなってしまうのです。

収集価値はどの程度でしょうか。

最も高価格となるのは著名なサー



(右) ハバ・カリフォルニアのサンミゲルにて、サーフィンに興じるドラ（1968年）。まれに出場したコンテストでもドラは好成績を残した。「ダ・キャット」と呼ばれるに至ったその独自のスタイルは、コンテストでも変わらなかった。[前ページと当ページ左] 1966年初めにグレッグ・ノル・サーフボードズ社から発売されたサーフボード「ダ・キャット」。

ファーが使用していた木材製のボードです。しかし、「ダ・キャット」の場合、少し例外的で、このモデルのオリジナルの状態のものが最近8000ドルで売却されました。これは、1960年代の同様のブランド製品の何倍もの価格です。近年のフォームサーフボードの場合、日焼けや繊維ガラスの損傷など、大抵の場合、使用に伴う傷がありますが、優れた修復により、出自の正統なボードの価値が大幅に高まる場合があります。

とはいえ、大多数のコレクターが無傷のものを好むのはいうまでもありません。1960年代末、非常に多数の「ダ・キャット」のボードが、突如役目を終えて保存されたことが、今日のコレクターに恩恵をもたらしているといえるかもしれません。

「パテックフィリップ マガジン・エクストラ」(patek.com/owners)にて、この記事の特別関連コンテンツをご覧ください。